

標本室を訪ねて

金沢大学理学部ハーバリウム

理学部ハーバリウムは生物学科自然史講座の植物標本室である。2階部分を吹き抜けにし3層構造になっている。第1・2層をハーバリウム、第3層を動物標本室としている。総床面積270m²、金沢城時代の2.5倍の広さを持つ。

自然史講座は、1949年本学の発足と同時に生物学科植物学講座として出発した。その後63年の修士課程の新設に伴い植物分類・地理学講座となり、90年に植物自然史講座、本年度から生態学を含めて大講座制をとり現在の呼称となる。ハーバリウムでは、その間の研究活動の結果収集されてきた標本が管理・活用されている。また第四高等学校の標本を受け継いだため、標本は百年の集積となる。

第四高等学校では、白山の自然史研究で知られる市村塘、本学発足後は、台湾・屋久島・北陸のフロラ、日本産のラン、群落生態学の研究の正宗巖敬、極東のスゲの研究の秋山茂雄、コケ植物の形態学の河合功、北陸のフロラ、日本産のラン研究の里見信生らの研究者による収集が、ハーバリウムの充実に果たした役割は大きい。この時点での標本の数には維管束植物14万点、コケ植物1000点であった。現在、維管束植物20万点、コケ植物1000点、地衣類500点の乾燥標本、花と地下組織の液浸標本1000点を収蔵する。



タイプ標本 センカクオトギリ

これらの中には新種の命名の基準となったタイプ標本が約200点含まれる。

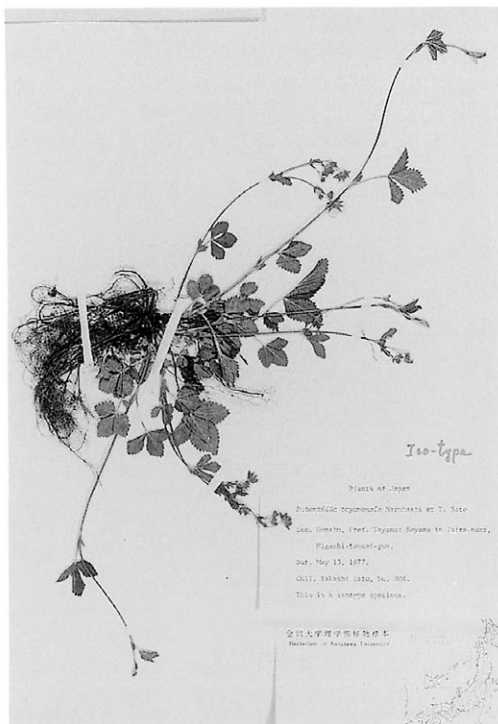
採集地は日本全国に及び、さらにここ数年間、ロシア、中国、ネパール、インド、タイ、インドネシア、マレーシア、ニュージーランド、オーストラリア、北アメリカ各地、ヨーロッパ各地等海外学術調査による標本が増加した。また、国内では東北大学、国立科学博物館、民間の各植物園、海外ではシンガポール植物園、中国科学院、ロシア科学アカデミー等の研究機関と標本交換を行い、資料の充実をはかっている。

一方、世界的視野に立つ研究に平行して、地域関連の調査も行っている。石川県地域植物研究会では『石川県樹木分布図集』(1994)、『石川県草本分布図集』(未刊行)を作成し、資料をデータベース化している。その資料の大半は本学ハーバリウムの蓄積に基づいている。また、金沢城内、角間地区の植物の調査による標本も網羅する。

本学ハーバリウムは国際登録記号をKANAとし、内外から多くの研究者を迎える。

収集・研究・分類・保存というハーバリウムワークは自然史研究の基礎を支えている。

理学部自然史講座教授 清水建美先生(資料館運営委員)
にお話を伺った。 (在田則子 資料館)



タイプ標本 エチゴツルキジムシロ